

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 3 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010 年度～2012 年度

課題番号：22520432

研究課題名（和文）ヘレロ語諸方言の比較研究に向けた東ヘレロ語の記述研究

研究課題名（英文）A descriptive study of Eastern Herero as a preparation for comparative research of dialects of the Herero language

研究代表者

米田 信子（YONEDA NOBUKO）

大阪大学・言語文化研究科・教授

研究者番号：90352955

研究成果の概要（和文）：東ヘレロ語コミュニティにおける現地調査で収集したデータをもとに、声調、テンス・アスペクト・ムードの体系、複文の構造を中心にヘレロ語の記述研究を行った。その成果は論文および国内外の学会や研究会で発表した。また国際共同研究については、2010 年度に Lutz Marten 氏（ロンドン大学）とヘレロ語の共同研究を開始したほか、最終年度には英国から 2 名のバントゥ諸語研究者を招聘し、これまでの成果発表と共同研究の展開を目的とした国際バントゥ諸語ワークショップを大阪で開催した。継続的な国際共同研究へ展開させる十分な土台ができたものと思われる。

研究成果の概要（英文）：Our project has concentrated on our main objective, a descriptive study of Herero. Relevant data for this study were collected during fieldwork in Eastern Herero speech communities. The description has focused primarily on the tone system, tense/aspect/mood system, and the structure of complex sentences. Some of the results of the research have been published as peer-reviewed articles, and others were presented at international and domestic conferences.

As for the perspective of international joint research, this project has started joint research with Lutz Marten (University of London) on Herero in 2010. In addition, as further effort to bring together current research on Herero/ Bantu languages from international communities, we organized the International Workshop on Bantu Languages in Osaka in 2012, and invited two Bantu linguists from England as guest speakers. The main objective of this workshop was to discuss our on-going research and to establish a direction for future international joint research. The workshop turned out very fruitful not only for the project but also for the Bantu linguistics community in Japan in general, and helped to build a solid foundation for further development of broader international joint research on African linguistics.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2012 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：ヘレロ語、東ヘレロ語、言語学、記述研究、バントゥ諸語、ボツワナ・ナミビア、国際共同研究

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 東ヘレロ語の調査の必要性

ヘレロ語は、ナミビアとボツワナに分布し、話されている地域によって「カオコランドヘレロ語（ナミビア北西部カオコランド）」、「中央ヘレロ語（ナミビア中央部）」、「東ヘレロ語（ナミビア東部及びボツワナ）」という3方言に大別される。

ヘレロ語はいわゆる「未調査のバントゥ諸語」ではなく、申請者自身が行なった調査を含めて、すでに一定の研究が行なわれている。しかし従来の研究の対象は専らカオコランドヘレロ語と中央ヘレロ語であり、東ヘレロ語に関するデータは全く欠如している。申請者が1995年以来断続的に行なってきた調査の対象も中央ヘレロ語である。ケルン大学のプロジェクトによる調査はヘレロ語研究の中では最も長期的かつ体系的なものであるが、その対象はカオコランドヘレロ語と中央ヘレロ語に限定されており、東ヘレロ語のデータの欠如とその補完の必要性はケルン大学のプロジェクトでも指摘されているところである。

ヘレロ語は複雑な声調体系を持つことで知られているが、その他にも明確なアニマシー階層や存在辞による感情表現といったバントゥ諸語の中でも珍しい現象が見られ、ヘレロ語のデータはバントゥ諸語研究においても重要な意味を持っている。しかしそのヘレロ語の3大方言のひとつである東ヘレロ語の調査がまったく手付かずの状態にあり、ヘレロ語の全体像を明らかにするためには何よりもまず東ヘレロ語のデータの補完が不可欠である。

### (2) 歴史的背景と言語環境の調査の必要性

ヘレロ語の方言として「カオコランドヘレロ語」と括られているヘレロ語の中にもかなりの変種間差異が見られることが最近の研究で報告されているが、東ヘレロ語は、ナミビア東部からボツワナ全域にわたる広い範囲に形成された小規模なヘレロ・コミュニティで話されているため、①話者コミュニティが広域に点在し、コミュニティ間の連絡が希薄である、②コミュニティ内に別の有力言語（ツワナ語）が存在する、③バントゥ諸語とは系統が全く異なるコイ・サン諸語が隣接しているコミュニティもあるなど、カオコランドヘレロ語以上に言語変化が起きやすい環境にあると言える。

また現在の言語環境のみならずコミュニティの歴史的背景も多様である。中央ヘレロ語と東ヘレロ語の話者は1904/08年のヘレロ＝ドイツ戦争を機に、それまでの居住地から移動して新たなコミュニティを形成したとされているが、実際には移動の時期はコミュ

ニティによってかなりの幅があり、1904年以前に移動し形成されていたコミュニティも少なくない。さらに移動先で隣接民族との関係も多様であったことが近年の歴史研究で明らかにされている。このような歴史的背景あるいはその背景に起因する言語環境の差異は、そこで話されている言語にも影響を与えている可能性が高く、言語変容の状況とその要因を分析するためには話者コミュニティの歴史に注目する必要がある。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は以下の3つである。

- (1) ヘレロ語の全体像を明らかにすることをめざした東ヘレロ語の総括的な記述研究
- (2) 中央ヘレロ語に関する調査研究の蓄積があるケルン大学アフリカ諸語研究所およびロンドン大学東洋アフリカ研究学院(SOAS)と連携して総括的なヘレロ語研究に発展させていく準備
- (3) バントゥ諸語の国際的な研究協力体制の基盤づくり

## 3. 研究の方法

本研究は次の2つの視点ですすめる。

- (1) 東ヘレロ語をカオコランドヘレロ語と中央ヘレロ語に並ぶヘレロ語の一方言として捉えた記述研究
- (2) 東ヘレロ語をナミビア東部とボツワナに分布するコミュニティで話されているヘレロ語変種の総称として捉えたコミュニティ間の言語差の研究

これら2つの視点から東ヘレロ語の調査分析を行った。(1)、(2)のために研究代表者の米田はナミビアとボツワナにおいて東ヘレロ語の記述調査と変種調査を行った。また連携研究者の永原は(2)の調査の前提ともなるコミュニティ形成の歴史的・社会的背景調査をナミビア、ボツワナ、ドイツにて行った。

## 4. 研究成果

### (1) 実施した調査と成果

米田は東ヘレロ語の記述研究のため毎年8月～9月に約3週間の現地調査を行った。永原は記述研究の前提となる「東ヘレロ語」と括られる変種が用いられているコミュニティの歴史的背景に関する調査を行った。具体的な調査内容と成果は以下のとおりである。(米田：①～③、永原④。それぞれの成果の詳細は「5.主な発砲論文等」参照)

①2010年度：東ヘレロ語の語彙調査と声調に関する調査、さらに比較のために中央ヘレロ語の調査も行った。中央ヘレロ語についてはすでにいくつかの先行研究があるが、それらの中でテンス・アスペクト・ムードの体系が十分に示されていないため全体像が

見えてこなかった。本研究ではテンス・アスペクト・ムードの体系をそれぞれの活用の声調形とともに明らかにすることができた。また複文に用いられる活用形を調べる中で、これまで報告されていなかった節連結の形式が見つかった。これらはアフリカ言語学や対照言語学の研究会で報告し、テンス・アスペクト・ムードの体系は論文にまとめた。

②2011年度：複文に関する調査、特に名詞修飾節、節連結の形式、類似した接続詞の使い分けなどを中心に調査を行い、ヘレロ語の複文に関する新たな知見を得ることができた。名詞修飾節に関する研究成果は他のバントゥ諸語との比較研究に発展させ、ワークショップで発表した。またヘレロ語の文法スケッチを執筆した。複文の節連結については現在論文を執筆中である（初稿はすでに提出）。

③2012年度：主に名詞修飾節の形式と意味関係に関する調査を行なった。名詞修飾節については、前年にスワヒリ語との比較研究という形で口頭発表を行ったが、そこに新たな調査結果を加えて論文にまとめた。これは25年度に出版される予定である。

④永原は期間中にナミビアとドイツにおいて文書史料を収集し、19世紀から現代までのナミビアとボツワナのヘレロ人の移動に関する基礎的史実を明らかにし、広域に点在する東ヘレロ語コミュニティの歴史的背景と分布を把握することができた。

## (2) 国際的研究協力と成果の国際的発信

アフリカ言語の研究者は世界的にも数が限られており国際的な研究協力は不可欠である。国際的な研究協力と成果の国際的発信は本研究の目的のひとつであったが、研究期間中には諸外国の研究者との積極的な研究交流および研究協力を行うことができ、継続的な国際共同研究へ展開させる十分な土台ができたものと思われる。具体的には以下のような活動を行った。

①2010年度：8月にオランダでアフリカ言語学会が開催された際にケルン大学とロンドン大学のヘレロ語研究者と研究会を開き、データおよび意見の交換を行った。2月にはロンドン大学で開催された African Linguistic Research Group の研究会に出席し、現地調査結果であるテンス・アスペクト・ムード体系と動詞の声調について報告した。またロンドン大学で中央ヘレロ語の研究をしている Lutz Marten 氏とヘレロ語の諸方言の比較に関する共同研究を開始した。

②2011年度：前年度に引き続き2月にロンドン大学で開催された African Linguistic Research Group の研究会に出席し、現地調査結果である節連結に関して報告した。また Lutz Marten 氏と翌年の国際バントゥワークショップについての具体的な計画を詰め、そ

こで共同発表する研究内容についての相談をした。

③2012年度：バントゥ諸語研究者である Lutz Marten 氏と Nancy Kula 氏を11月に英国より招聘して大阪で国際バントゥ諸語ワークショップを開催した（「東・南部バントゥ諸語における動詞派生形の記述・比較研究」課題番号：22520433 研究代表者：小森淳子、「東アフリカにおけるスワヒリ語諸変種の記述研究」課題番号：23320086 研究代表者：竹村景子と共同開催）。バントゥ諸語研究に関する国際的なワークショップの開催は日本では初めてのことであったが、活発な意見交換を行うことができ、大変有意義な機会となった。さらに次年度以降の国際共同研究についての具体的な計画を立てることもできた。また2013年3月には共同研究者の森本雪子氏をベルリン・フンボルト大学から2週間招聘し、ヘレロ語とマテンゴ語の情報構造についての共同研究を開始した。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

①米田信子. アフリカにおける識字を考える. 『ことばと社会』, 査読有, 14号, (2012), 43-66.

②永原陽子. 植民地研究の現在—アフリカ史の場合. 『歴史評論』, 査読無, 752号, (2012), 50-62.

③YONEDA Nobuko. Word order in Matengo (N13): Topicality and informational roles. *Lingua*, 査読有, 121-5, (2011), 754-771.

④米田信子. ヘレロ語における動詞の声調（バントゥ系, R31）. 『スワヒリ語&アフリカ研究』 査読有, 22号, (2011), 109-131.

⑤永原陽子. 植民地体制の国際化と『植民地責任』—南部アフリカを手がかりに—. 『歴史学研究』, 査読有, 872巻, (2010), 2-10.

〔学会発表〕（計9件）

①米田信子. ヘレロ語名詞の声調 (Bantu R31): 声調グループと実現形. 東京音韻論研究会 (招待講演) 東京大学 駒場キャンパス (2013.3.16)

②NAGAHARA Yoko. History as an African Potential. 2nd International Forum on Conflict Resolution and Coexistence through Reassessment and Utilization of African Potentials rum on Conflict Resolution and

Coexistence, Bronte Hotel (Harare, Zimbabwe)  
(2012.12.8)

③ YONEDA Nobuko. Noun-modifying clauses in Bantu languages. International Workshop on Bantu Languages. 大阪大学中之島センター (2012.11.11).

④ 永原陽子. 現代史の中の「植民地責任」— アフリカ植民地を中心に. 東北亜歴史財団シンポジウム「韓日協定体制と『植民地』責任の再照明」, 東北亜歴史財団 (ソウル, 韓国) (2012.6.22)

⑤ 永原陽子. 世界史の中の植民地支配責任. 国際シンポジウム「植民地支配責任を考える— 歴史と法のあいだ—」, 同志社大学 (2012.2.18)

⑥ 米田信子. バントゥ諸語の名詞修飾節 — スワヒリ語とヘレロ語の例—. 「複文構文の意味の研究」ワークショップ, 神戸ユニティ (2011.12.18)

⑦ 永原陽子. 戦争責任と「植民地責任」. 第10回日韓・韓日歴史家会議, はあといん乃木坂 (2010.10.30) (招待講演)

⑧ 米田信子. ヘレロ語の声調体系 (バントゥ諸語, R31) — 名詞と動詞の声調型を中心に—. 関西言語学会第35回大会京都外国語大学 (2010.6.27) (招待講演)

⑨ 永原陽子. 植民地体制の国際化と『植民地責任』— 南部アフリカを手がかりに—. 2010年度歴史学研究会大会, 専修大学 (2010.5.22) (招待講演)

[図書] (計6件)

① 米田信子他. 『ボツワナを知るための52章』池谷和信(編), 明石書店, (2012), 全322ページ, 米田担当箇所: 第11章 ヘレロ語を話す人びと—ヘレロ人とンバンデル人—. 78-83.

② 米田信子他. 『アフリカ諸語文法要覧』塩田勝彦(編), 溪水社, (2012), 全301ページ, 米田関連担当箇所: ヘレロ語 (R31). 256-271.

③ 米田信子他. 『多言語主義再考 — 多言語状況の比較研究』砂野幸稔(編), 三元社, (2012), 全755ページ, 米田担当箇所: ヨーロッパ発「多言語主義」とアフリカの多言語状況. 118-141.

④ 永原陽子他. 『植民地支配責任を考える— 歴史と法のあいだ—』, 同志社大学人文科学研究所, (2012), 全111ページ, 永原担当箇所

: 世界史の中の植民地支配責任. 40-81.

⑤ 永原陽子他. 『アフリカと帝国—コロニアリズム研究の新思考にむけて』, 井野瀬久美恵・北川勝彦(編), 晃洋書房, (2011), 全322ページ, 永原担当箇所: 20世紀初頭西南アフリカアフリカにおける二つの植民地主義—『ブルーブック論争』から—. 252-274.

⑥ 永原陽子他. 『生まれる歴史、つくられる歴史—アジア・アフリカ史研究の最前線から』永原陽子(編), 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, (2011), 全227ページ, 永原担当箇所: マンドゥメの頭はどこにあるのか—ナミビア北部・クワニャマ王国の歴史と現在. 123-151.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

米田 信子 (YONEDA Nobuko)  
大阪大学・言語文化研究科・教授  
研究者番号: 90352955

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

永原 陽子 (NAGAHARA Yoko)  
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授  
研究者番号: 90172551